

平成27年度 学校評価 自己評価書

あま市立甚日寺南中学校

1 総括

(1) 教育目標とめざす姿 (学校経営案より)

校 訓	真 真理を求め続ける生徒・教師	め ざ す 姿	・自ら課題を見つけ、自ら考え、表現できる生徒・教師
	善 礼儀正しい生徒・教師		・苦しさに負けないで心身を磨き、鍛える生徒・教師 ・場をわきまえ正しい判断のできる生徒・教師
	美 感性豊かな生徒・教師		・互いに相手を尊重することができる生徒・教師 ・正しいこと、美しいものに感動できる生徒・教師

※学校経営の理念；『学校は、楽しいところでなければならない。
しかし、歯をくいしばり 涙をこらえてがんばるところでもある。』
『時を守り、場を清め、礼を正す』

(2) 本年度の重点努力目標

ア 「よさ」に着目し、明るく、節度ある学校・学級づくり

- ・ 人権教育を通して、生徒が自己肯定感や自己有用感を高めることができる学校・学年・学級づくりに努める。
- ・ 全ての教育活動を通して、教師は人権感覚を磨き、心の居場所のある学校・学年・学級づくりに努める。

イ すべての生徒が「分かった」「できた」と実感できる魅力ある授業づくり

- ・ 基礎的・基本的な学習の定着を図るとともに、グループ学習を取り入れ、生徒のコミュニケーション能力を高めさせる方法を研究し、教師の授業力向上に努める。
- ・ 「通級指導教室」を有効に活用し、気持ちを安定させると共に基礎学力の定着を図る。

ウ たくましく生き、心豊かな生徒の育成

- ・ 道徳の授業や全校及び学年での集会活動を核に、善悪の判断力・忍耐力を身につけさせ、規範意識の醸成を図り、モラル向上を図る。
- ・ 体験的な学習を重視し、個の可能性の伸長に努め、生涯学習の基礎的能力や態度を培い、社会の変化に対応し、主体的に生きていく力の育成を図る。
- ・ ボランティア活動への積極的参加を図る。

エ 生徒の心を和ませる教育環境づくり

- ・ 教師の「語りかけ」を日頃から大切にし、心が通い合う環境づくりに努める。
- ・ 「もっけい清掃」を推奨し、環境美化の心を育てる。
- ・ 校内にある掲示板を有効に活用し、「ぬくもりのある学校・学年・学級」の雰囲気づくりに努める。
- ・ 便教会との連携を図る。

オ 共に育つ地域・校種間連携の推進

- ・ 学校から家庭や地域へホームページにより、積極的に情報発信をする。
- ・ 学校・家庭・地域及び関係機関が一体となり、「協働」して、地域で生徒を育てていただけるよう、積極的に情報収集し、一人でも多くの生徒が地域活動に参加できるよう促す。
- ・ 学校評議員制度の一層の充実を図り、PTA活動やおやじの会の活動等とも積極的に連携を図り、家庭や地域及び関係機関等の教育力を生かした「開かれた学校づくり」の具現化を積極的に進める。
- ・ 本校の教育活動をより充実させるために、学校評価を実施し、その結果を有効活用しながら、具体的な対応策を考え、「信頼される・開かれた学校づくり」を進める。
- ・ 義務教育9年間を見通し、学習・生活面での指導や支援をより充実させるために、小・中学校教育及び近隣中学校との相互理解を図るための交流活動等を行う。(小・中及び中・中連携教育の充実)

2 学校評価の実施体制

(1) 調査時期 平成28年1月7日～14日

(2) 調査項目 別紙アンケート参照

(3) 調査対象 有効回答者数/対象者数

- ・生徒 578名/全614名
- ・学校評議員 3名/5名
- ・保護者 483名/568名
- ・教職員 36名/36名 計1100名

※保護者は、家庭数で依頼

3 調査結果

別紙アンケート結果参照

- (1) 昨年度と比べて、どの項目もよい結果が出ている。学校が落ち着いてくると、生徒・保護者だけでなく、教師の評価もよくなっている。
- (2) 職員・保護者と生徒との数値のギャップがある項目や職員と保護者・生徒とのギャップのある項目がある。意識のズレが生じている。
- (3) 生徒・保護者から多くの貴重な自由記述が寄せられた。具体的改善に役立つ貴重なヒントが多くあり、謙虚に受け止め対応していきたい。

5 成果と課題

(1) 学校経営

- 教師が生徒とともに活動していることや、教師集団で連携をとっているという結果が大きくポイントアップしている。学校がよくなっているということが、教師の意識の中でも大きくなっていることと判断できる。今後も現状維持していくことが大切である。

(2) 学習・部活動

- 「わかりやすい授業」の項目が全体的に高くなり、現職教育の成果と考えられる。しかし、「発言したり、活動したりする工夫」の項目では、教師だけが低い評価をしている。生徒や保護者からの評価はよくなっているため、教師の意識が高くなっていると考えられる。また、部活動の指導を意欲的に取り組んでいるという教師が増え、大会での成績にもそれが反映している。

(3) 生徒指導

- 保護者や生徒がよくなっているというポイントは微増しているが、教師は大きく増加している傾向がみられる。頑張ったからよくなっていると感じている教師が増えていると思われる。

(4) 人権教育

- 「学級の人や友だちを大切にしている」という項目は全体的に増えているが、「言葉遣い」の項目では、逆に減少している。言葉のつかいかたで問題に発展することも多いので、意識を変えて指導していく必要がある。

(5) 環境

- 施設環境については全体的に向上している。ただし、トイレについて多数の方々から改修を望む意見をいただいた。

(6) 連絡

- 配布物を家庭に渡していないという保護者の意見をよく耳にするが、アンケート結果にもそれがあらわれている。大切なことについては、メール配信するなど、検討する必要がある。

6 改善策

(1) 学校組織

生徒の課題は共有化を図り、役割を分担し対応していく。そのため、日常の人間関係を組織づくりを重視していきたい。

(2) 職員室運営

職員室運営の基本は、生徒に指導する前に教職員自身はどうかと問うことにある。

学校に来られた方がよく言う「職員室に入ると、その学校が分かる」と・・・。子ども達へ挨拶の大切さを説きながらも、教師が来客に挨拶も出来ないようでは問われて当然である。普段の挨拶もそうである。

二つ目は机上机下の整理整頓である。生徒に整理整頓の必要性を説いても、自ら机上机下が乱雑のままであれば、生徒はその教師のことをどう思うか。その答えは明白である。

その他、我々は様々な場面で生徒を指導し関わっているが、その一挙一動は、生徒や保護者から見られている。従っていつでも見られてもよいような態度や対応が求められており、生徒に自ら範を示していくのが我々教師の立場であることを意識していきたい。

(3) 学年、学級経営

学年、学級経営は望まれる学校づくりの「要」である。

「要」づくりのためには、生徒一人一人の身近に位置し、様々な活動を教育的意義に裏打ちされた活動とすることである。

毎日、毎日の繰り返しの中で生徒と接していても、見えなくなることが多くある。生徒の姿が見えなくなり、日々変わる生徒の実態把握を怠るならば、適切な学級経営はなされなくなる。

同じ活動でも、教育的価値をもたらせるやり方と、結果的にただやったことに過ぎない活動では、生徒が身につけるべき力に雲泥の差が生じるのは当然であることを意識したい。

(4) 特別支援

特別支援教育は、教育活動の原点である。

個別指導を中心とする指導には、試行錯誤と工夫が重視される。また、そのための意見交換の活性化が必要である。個人の特性に応じて学校を卒業した後に自立した生活することを目指す教育活動であり、それぞれの活動ねらいは「社会生活の中で活用出来る」ことであり、学ばせたことはたえず社会化することが求められる。

そこには個人の特性があり、障がいの程度や違いがあり、個々の生徒の状況に応じて個別指導中心に教育を進めて行かなければならない。その状況に応じた指導方法や教材の工夫などが求められる。

さらにそれを支えるために、支援学級の教職員が意見交換をし、よりよい指導方法などを模索することが望まれる。

また特別支援教育では保護者との連携が重視されることは、言うまでもない。そのため家庭における状況の把握や、学校での学習内容の理解と協力を求めるためなど、保護者との連携が必要となる。

(5) 校務分掌

円滑な教育活動を進めるため、学校の成員が役割分担し相互に連携しながら活動するのが校務分掌である。

そのためにはまず、自身が担った分掌が学校の発展のためどのような役割を果たすのかの理解を深める必要がある。さらに前年度より、進展した内容を提示して頂きたい。

前例踏襲には、生徒の実態を踏まえ、よりよい活動をするという視点に欠ける。そこには発展性もみられないし、しいては教育活動の停滞につながる。

(6) 研修活動

学校現場では毎日に教育活動に忙殺され「忙しい」を合い言葉に研修活動が、ないがしろにされる傾向がある。しかし、研修こそが教師たる所以の生命線である。「生徒は教師ほどに伸びる」と言う言葉通り、我々の力量ほどにしか生徒は力をつけない。言い方を変えるならば、我々が力をつけた分、生徒は伸びることが出来るのである。

生徒の問題点を挙げ、うまくいかないのを生徒のせいにするのではなく、私たちが力をつけることで生徒の問題は解決することも多い。

よい学校とは、生徒を伸ばすことが出来る学校であり、教師が学び続けることが出来る研修風土を互いに築くことできる学校であると位置づけ取り組みたい。

(7) 道徳指導

学習指導要領の目玉の一つは、道徳教育の充実である。年間指導計画に基づき道徳的实践力を身につけさせるため、道徳の授業を大切にしたい。

道徳が教科になることをふまえ、道徳授業の充実のため、道徳の授業づくりについての打ち合わせを持ち、学校・学年をあげて組織的に取り組むようにする。

(8) 保健・安全指導

保健安全指導の重点は、自他の健康と安全を守ることにある。

具体例を言うと、寒いときは温かい服装をする。風邪が流行ったときはうがい手洗いを励行するなど、健康を保持することに鈍感にならないようにさせることである。

安全指導とは、「危ないな」と察知し、身の危険を予知することが出来ることである。さらに保健室へ足を運び、自分の生徒がどういう状況でいるのか、どんなことを抱えているのかなど養護教諭と連携し把握に努める。

保健・安全指導の基本は、先ず教師自身が鈍感にならないことである。

(9) 学力向上

当然のことながら学校に求められているのは、個々の生徒に確かな学力を身につけさせることである。学力向上のためには、学習指導要領に基づいた教材研究が重要である。さらに学力向上の取り組みには、検証が必要である。生徒の課題はなにか。どこが出来て、どこが出来ないのだろうか、その理由は何だろうか、またその解決のための方策はどうするべきか、そして実践しその成果と課題を明らかにする一連のサイクルの確立が求められる。さらに、学習規律の問題、家庭学習の充実のための学習習慣など、生徒の側に立って整理し共通認識のもとに学力向上のために指導していく。

(10) 授業づくり

よい授業は教師の生命線である。生徒にとって分かる授業をたえず工夫し、授業改善を図ろうと努める先生は当然のように生徒指導も成立する。生徒の学習状況が好ましくないのは、生徒に問題があるのではなく、教師の授業づくりに課題があると考えて、日々工夫・改善を図る。

(11) 生徒活動

生徒の力を信じて伸ばすことが、生徒活動の重要な視点である。結果的に生徒は、教師の指示されたように活動すればよいとはならないだろうか。生徒の発想は斬新であり、学校がよくなるのは生徒が本来持っている力として発揮させることにある。そのための援助するのが教師の立場である。教師が活動の前面に立つことではない。

生徒活動における教師の役割は黒子であり、ねらいの立て方や活動の仕方、手順などを指導し最終的には生徒自身の手で活動できるように育てることにあることを意識して取り組ませる。

(12) 保護者（地域）との関係

不安や悩みを抱えている保護者もいる。そのような状況を踏まえながらも、それぞれの親の立場になって心から傾聴し、失礼のないように必要なことを伝えることは学校教育を進める上でも、保護者との信頼関係を築くためにも極めて大切である。様々な状況を含め、親との関わりを聖域化せず、積極的に保護者と関わることが教育活動を進めていくなかで極めて重要であると位置づけたい。

(13) 地域との関係

地域あつての学校である。学校は改めてその意識を内向きから外向きに視点を移していかなければならない。また学校と社会はウイン・ウインの関係でなければならない。学校は社会のために何ができるのか。社会は学校のために何ができるのであろうと考え、共存し、互いを高めていく関係を強化したい。

(14) 問題行動

問題行動の対応の基本は一つは「毅然とする生徒指導」である。

問題行動を繰り返すような生徒にも、次回への期待を込め温情的な采配をふるうことが多くみられるが、しかし現実はどうだろうか。再び繰り返すことが多いのが実情である。そのため教師や生徒への危害、学校の安心安全に大きな問題としてその都度対応を余儀なくされる現実がある。

集団の秩序を乱し、人に危害を加える行為を中心に、対応のレベルを明確にし保護者や生徒へ具体的に提示する。

該当の行為が見られた場合は、その視点に従い厳正な対処する。

二つ目は生徒理解に基づく対話である。

生徒理解とは、生徒の置かれている状況を理解しありのままを受容する行為である。具体的には「分かってあげる」ことである。それは顕著な問題行動を繰り返す生徒ばかりでなく、それ以外の生徒に対しても同様の対応が求められる。生徒理解とは生徒を甘やかすことではない、生徒個々に現在地を理解させ、自分自身を振り返り考えさせ、自分を律する心を持たせること力点を置きたい。

(15) 学校図書

学力が高い生徒ほど読書量が多いと言う実態を受け、読書が重視されているが、単に文字に慣れ親しむのではなく思考力や想像力さらに洞察力など、人間力を高めるに非常に有効な手段である。

現在、読書そのものを阻害しやすい社会環境であるものの、その必要性や重要性を説きその機会を拡大していきたい。

(16) 学校通信・ホームページ

学校通信は保護者や生徒との信頼をつなぐ絆である。形式的な内容ではなく、生徒の様子、学級活動の様子など生徒の励みとなるよう工夫する。また、保護者が家庭においても学級の活動の様子が手に取るように分かり、通信の話題が親子の会話の潤滑油となり信頼関係を構築するために必要な内容となるようお願いしたい。これは学年通信、保健たよりなども同様に考え実践したい。

(17) 部活動

部活動は、活動を通して信頼や絆を深め人間性を高めるために、大きな意義を担っている。技能だけでなく、礼儀マナーを身につけ、集団としての意識を高め、目標達成のために努力することを学ぶ場でありたい。

しかし学校の教育活動は部活動が全てではない。部活動をさえすれば教師が成り立つような考え方は、教育そのものを偏向させる。

また指導は力に頼るだけの指導ではなく、生徒の意欲が喚起され、主体的に目的を共有しながら活動に取り組むことが出来る、魅力ある活動となるよう指導方法を工夫する。